

制度と市場の狭間を生きる 農民工の過去、現在と未来

改革開放以後の経済制度を模索するなか、制度と市場の激変に翻弄されながらも力強く生きてきた農村労働者。かつて差別的に3K労働者、犯罪の温床と位置づけられていた彼らは、現在、階層分化の中で都市住民へと身分を変えつつある。彼らの未来はどうなるのか。時代的背景を振り返りながら、今後の展望について論じる。

嚴 善平（同志社大学大学院グローバルスタディーズ研究科教授） × 堀口 正（大阪市立大学大学院生活科学研究科教授） ×

原田忠直（日本福祉大学経済学部准教授） × 川村潤子（名古屋大学大学院人文科学研究科博士後期課程） × 司会 金 湛（愛知大学現代中国学部教授）

金 本日は『中国21』Vol.53 特集「農民・農業・農村の座談会」のためにお集まりいただき、誠にありがとうございます。

改革開放以後、三農問題は常に重要だと意識されていますが、そのなかで最も解決しなければならないのが農民の貧困です。経済成長のなかで、農民が労働者として都会に出て、生活空間と経済的立

場を変えていくことは多くの国でもよくあることで、特別なことではありません。しかし、戸籍を始めとする特殊な社会制度と時代背景が変わるなかで、中国の農民は諸外国の農民と異なる経験をしてきました。さて、今回の座談会のテーマは「制度と市場の狭間を生きる農民工の過去、現

在と未来」です。ご出席いただくのは、同志社大学の嚴善平先生、大阪市立大学の堀口正先生、日本福祉大学の原田忠直先生と私は愛知大学の金湛と申します。さらに今回は、研究の時代性と継続を意識して名古屋大学大学院博士後期課程の川村潤子さんに参加していただきまして。今後この分野を担っていく若手の立

場から先生方に質問し、今までの研究のなかで培った知識に基づいて発言しているだけだと思います。

まず、中国の農民工の位置づけ、特徴について考えたいと思います。他の国でも農民工のような労働者が存在します。出稼ぎ労働者、農村労働者など、その呼び方は違いますが、故郷に農地を持ちながら、都会で第二次、第三次産業の労働者として働くことが一般的です。国によって、農村を出た労働者が最終的に都会に移住して、都市住民としてフォーマルセクターに就業することもあれば、劣悪な環境に集まり、スラム街を形成することもあります。他の国と比べて、中国の農民工は異なる存在となります。皆さんにはご自身の経験を踏まえて、それぞれの問題意識についてご説明いただければと思います。

世代間の異なる見方と問題意識

金 参加者の皆さんは生まれた年代も農

民工に出会った年代も違います。厳先生と原田先生は一九六三年生まれ、堀口先生は一九六四年ですね。

原田 厳先生と生まれた年は同じですが、それぞれが農民工に遭遇した時の印象というか、捉え方というのは、大きく違っていたのではないかと思います。厳先生は何年に日本に来られたのですか。厳 八五年です。八四年に大学を卒業してその翌年に来日したのです。

金 一九八五年は私が小学校を卒業した年です。一九九三年に日本に来ました。その年に川村さんが生まれました。

原田 かなり幅のある世代が集まりましたね。あまり昔の話をしても意味がないのかもしれませんが、私が一番初めに中国に行ったのは一九八七年です。そのときはゼミ旅行でした。実際に研究を目的として中国に行ったのは一九九〇年です。上海の華東師範大学で言語を学びながら、近郊農村の農業生産についての調査を始めました。留学中、大学の近くのレストランで働いていた山東省出身のある女性に出会ったのが、農民工との初め

てのコンタクトでした。知り合ってしばらくして、彼女が生活していた上海市近郊の農村に連れていってもらったのですが、正直、強烈なインパクトを受けました。今まで、見たことも触れたこともなかった生活空間というか、その汚さ、不衛生さに言葉を失いました。それと、もう一つは、別にマルクス経済学を真剣に勉強していたわけではありませんが、中国は社会主義であるにもかかわらず、こんな場所が存在するのか、上海市民と農民工の違いがここまであつていいものなのかと、驚きました。本来は上海の農業について勉強することが目的だったのですが、農民工のほうへ引き込まれていったというのが、三〇年ぐらい前の話です。豊かな日本で生活する者にとって、農民工の劣悪な環境を目撃して、びっくりして、大混乱に陥ったというのが、農民工と遭遇した時の印象です。

厳先生は当然、違いますよね？

厳 若干違いますね。農民工という言葉自体が当時なく、その前の数年間は「民工」という言葉でした。民工という言葉

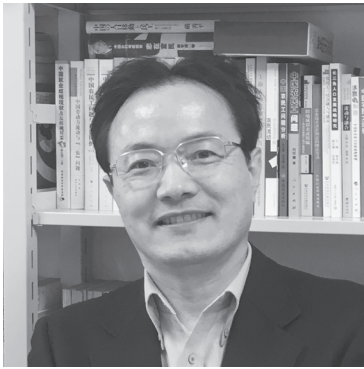
も九〇年頃の「盲流」から始まった。八〇年代にはそもそも民工もなく、当時は郷鎮企業が発達していて、基本的には農村から都市への人口移動が許されていなかったんですね。

八七年に修士論文の資料集めのために初めて農村調査に行きました。いくつかの地域を歩き回ったのですが、当時は農村都市化というか、「小城鎮」が中心で、人口移動はそもそも念頭にはなかったんです。だから、農家の人たちは過剰となっていて、それを解消するために郷鎮企業を興そうという時代でした。修士論文では、ルイスの二重経済モデルを使って労働移動と経済発展について書きました。ただ、労働移動とはあくまで農業セクターから非農業セクターへの移動でした。

当時、東京国際大学の栗林純夫先生もこのテーマで論文を書かれました。ルイスの二重モデルを発展させながら、農村のなかの農業と非農業、農村と都市、都市のなかのインフォーマルセクターとフォーマルセクター、つまり、二階層二

重経済という理論モデルを作ったのです。ルイスモデルを農村における農業セクターと非農業セクターの間で起こった労働移動と資本蓄積の視点から経済成長のメカニズムを分析した私の研究とは異なっていました。

時間が経っていくにつれ、労働移動は三つの段階を経てその性質が大きく変わったように見えます。最初は「離土不離郷」、つまり、農業はやめるけれど農村からは離れないということです。九四年の前半までは農村の都市化が強調され



嚴 善平[Yan Shaping]

ていたからです。次の段階は九五年頃からです。九〇年代に入って沿海の都市部で労働力不足が徐々に発生し始めました。違法だけれど都市部や沿海地域へ自発的に出稼ぎに行こうとする人が急増しました。当時の労働部はそれを「盲流」だと捉え、その動きを止めようとしたが、失敗に終わりました。止められない以上、しかも必要なことから、労働部も秩序ある移動を誘導しようとする方針転換しました。九四年の労働部通達がきっかけで、大規模な地域間の労働移動が始まり、九五年から二〇〇〇年の五年間に、すごい数の出稼ぎ労働者が現れたのです。

ただし、当時の戸籍制度改革はまだ初歩的なもので、都市部に移動してきた者は非合法的な存在でしかなかったのです。生産ラインや工事現場を中心に体力勝負の仕事に従事する人がほとんどでした。また、若いうちは仕事があります。加齢とともに田舎に帰らざるを得ない人が出てきます。農業を離れ、田舎からも離れるものの、いつかは帰郷する、

つまり「離郷不背井」です。これは第二段階にあたり、九五年から二〇〇五年の十年ぐらいです。この間に、大規模な労働移動が発生しましたが移住はできません。戸籍の転出も転入も認められなかったのです。農民工は基本的に流動人口として扱われたわけです。

そうしたなか、色々な問題も発生しました。二〇〇六年に国務院を中心とした関係省庁が集まって問題解消の対策を検討することになりました。その通達に農民工という言葉が初めて出たんですね。そのとき、出稼ぎ労働者だけでなく、地元に残った非農業従事者も農民工として初めて定義されました。今の統計では田舎に残った者と郷鎮を出た者の両方が統計されています。

金 つまり、離農ということですね。**厳** 離農するとともに離村もしますが、戸籍の移動ができないから流動人口という形でいるわけです。ところが、二〇〇〇年代後半以降、農民工の中身が変わってきます。歳を取っていく人が増え、新規参入の若い世代も急増している。いわ

ゆる新世代農民工は、農業をやる気がなく、できるわけもなく、将来田舎に戻る気も全くないといわれます。その段階から農民工の市民化という話が出始めたのです。そのために戸籍制度改革が求められるわけですね。二〇〇八年から新型都市化政策が決定され、同時に戸籍制度改革も加速されようとなりました。その頃からは、戸籍制度改革が加速し、都市のレベルにに応じて戸籍の転出・転入が可能となったのです。農業をやめ農村から離れて、完全に都市に移住するという第三段階の「離郷又背井」です。

この労働移動の三段階についてまず確認する必要があります。

金 郷鎮企業に関しては堀口先生が調査、研究されていきました。当時の農民工、あるいは郷鎮企業、農村の工業化に対して、感じられたことをご紹介いただけますか。

堀口 初対面の先生方がいらっしゃいますので、簡単に自己紹介を。私も原田先生と厳先生と同じ世代です。中国に初めて行ったのは八九年、天安門事件が起

る前の三月のことです。旅行というかたちで一か月間回って、帰ってきたら天安門事件が起こってしまった。北京大学にも、上海の大学にも見学に行ったのですが、それほど荒れた雰囲気ではなかったので、日本に帰ってきてからあのような事件が起こったことがすごく衝撃的で記憶に残っています。その後、九三年の龍谷大学大学院在籍時に少し奨学金ももらって、復旦大学に一月ぐらい語学研修を含めた短期留学をして、当時、関西大学の石田浩先生の研究会に参加させていたこと、

から、そのときに、厳先生の同期の方だと思うのですが、上海社会科学学院の王振先生（当時、京都大学大学院に留学）とお会いして、調査とまではいきませんでした。上海郊外農村のお話を伺うなどしました。当時は社会人類学者の費孝通の本を読んでいましたので。もともと中国のことについて興味を持ってはいたのですが研究として取り組んでいたわけではなく、九三年に中国から帰って来てから、石田先生の下で農村経済、農業経済について本格的に研

究を始めました。

その後、中国政府の奨学金をもらうことができ、九六年から九九年まで二年半ほど復旦大学に在籍して、先ほど金先生からご紹介があったように、郷鎮企業のできる背景であるとか、それを運営するにあたってどのような人たちが活躍したのかということを実地調査しました。今だったら警察に睨まれているかもしれないませんが、その頃は厳しくなく、週末など授業のない時に自転車で上海郊外をブラブラと回っていました。そうするうちにたまたま上海浦東新区の地域の人と知り合い、その友だちの息子さんが私の通訳になってくれて、上海語から普通話に訳すというかたちで、社会主義革命が起こって文化大革命という時期に現地の人々がどのように生活してきたのかというのを、のべ百人ぐらいの人から聞き取りしました。そのように人づてにたどって、彼らの生活をイメージしながらわかったことは、社会主義の時代でありながら、当時は上海の都市部で革命運動がとても盛んだったので、モノの生産が

停滞していて、それを補うかたちで郊外にいる人材——実は五八年以降、都市で働いていた人が農村に下放されるという政策が実施されていました——が、都市部（国营企業）とのネットワークを築きながら都市部で生産できなかったモノの生産を補っていたということです。それがおそらく上海郊外における工業化の一つのきっかけになったのではないかと、ということの研究して博士論文を書きました。

最近、中国では下からの革命とか農民



堀口 正 [Horiguchi Tadashi]

の自立性ということが言われていますが、おそらく下からの革命とか自立性があつたとしても、それを受け入れる側と繋げるルートがなければ、農村で製造したものを市場で取引することはできません。私の仮説としては、都市部と上からの政策的なもの、フォーマルなもの以外にインフォーマルなものもとても重要であり、それを繋ぐネットワークや支援があることによって経済的な取引が実現したのではないかとことです。それは社会主義云々といったものではなく、市場史研究や日本の「株仲間」の役割を分析した研究でも、同じようなことが指摘されています。その後、当時の社隊企業が改革開放後に郷鎮企業になった。それによって、地元中心の雇用から今日のテーマである農民工を受け入れるという流れのなかで、郷鎮企業がどのように経営を変化させていったのかを論文で書き、今も少しずつ調べています。詳しいことは、後ほどまた議論できればと思います。

金 川村さんほどのような経緯で農民工

に対して興味をもって、なぜそれをテーマに選んだのですか。生まれたのが一九九三年ですから、先ほど厳先生の話にもありましたが、ちょうど農民工が爆発的に増える時期でした。その二〇年後に農民工のことは川村さんの目にどのように映ったのか。あるいはどう感じたのかを簡単に紹介していただけますか。

川村 今、お話を聞いて思ったのですが、先生方は、生まれた場所も育った場所も、背負われているものも違うわけです。ちょっと勝手な解釈になりますが、厳先生は貧しい中国から豊かな日本を見て、さらに発展する中国を見られてきたわけですね。原田先生と堀口先生は豊かな日本から豊かになっていく中国を見てきた。その意味でいえば、私は、もう豊かではない日本から豊かになった中国を見てきたと思います。

私が初めて中国に行ったのは二〇一二年の二月、大学一年生の春休みです。何かを見たくてということではなくて、安く海外旅行に行けるからということでも多くの学生と一緒に原田先生に誘われて遊

びに行ったのが始まりです。約一か月間、民工子弟学校でお世話になりました。その学校には、日本語を話せる先生が数人いて、楽しい日々を過ごすことができました。ただ実は、その学校が民工子弟学校だとは知らなかったんです。それどころか、農民工という言葉も知りませんでした。帰国後、農民工について調べたり、話を聞いて、いわゆる戸籍制度によって様々な制約があるということを知りました。ただ、書物のなかに出てくる農民工というのは、援助しなくてはならないとか、貧しさの象徴のように描かれていて、違和感を持ちました。私が一か月間過ごした学校で知り合った農民工、特に子どもたちはものすごく元気でパワフルで、どうして助けなくてはいけない人たちののだろうかというようなことを感じました。それに、帰国後、農民工たちを羨ましくも感じるようになっていました。なぜ、それほど前向きに生きられる社会があるのかと。また私は、大学卒業後、高校の講師をしていて、その高校はいわゆる教育困難校だったので

が、まさに日本では最底辺層を形成していく予備軍のような生徒たちを目の前にして、この子たちは将来を描くことが難しいし、だからといって、将来を切り開いていくためのパワフルさも感じられないのに、農民工の子どもたちはどうして前向きに生きていられるのか、この違いは何なのかという衝撃を受けました。この謎を解明したいというのが、大学院に進んだきっかけです。簡単にいえば、可哀想という言葉が適切かどうかわかりませんが、どうして、農民工は可哀想な存在として捉えられるのかというところに違和感と興味を持つようになってきたということですね。

金 なるほど。それからずっと農民工の研究をされて、定期的に中国を訪問されるようになったのですか。

私はちょうど先生方と川村さんとの中間の世代にあたります。私が一九九三年に日本に来た時に、北京には民工と呼ばれる労働者はいましたが、記憶ではそれほど大勢ではありませんでした。当時、確かに北京市民と農民工の間の関係は

徐々に悪化するようになり始めていたが、農民工に対する拒絶感は二〇〇〇年代以降ほどではありませんでした。

日本に来る前、中国は豊かではなかった。例えば小学校の時、家具を家具屋さんで買うと非常に高いので、多くの北京市民が自分で木材を調達して、農村から来た出稼ぎの職人に頼んで、アパートの前で家具を作ってもらっていました。三日間ぐらいで出来上がります。彼らは近くの旅館や民家に泊まり、三食は雇用主が提供して、賃金は家具の種類にもよりますが、高くても三〇元でした。

その間一緒に遊んだり、木くずで簡単なおもちゃを作ってくれたりした、楽しい思い出があります。その頃から廃品回収などのいわゆる3K労働も農村からの労働者が担っていました。この人たちがいなければ私たちも生活が成り立たないという感覚は確かにありました。日本に来てからしばらくすると、帰国するたびに農民工に対する北京市民の視線が厳しくなり、拒否する感情が強くなっていくことを感じました。最終的に農民工だけ

ではなく出身地に対する差別まで発展したような気がします。例えば、地方出身の大学生まで差別の対象になりました。非常に残念なことです。

私がこのように感じるのは留学した経験も関係しています。九〇年代後半から二〇〇〇年代初期、私が帰国したときに同級生たちが集まって農民工に対する差別的な発言をしているのを聞くと、自分が日本で同じことを言われているような感覚になりました。当時日本と中国との間の経済格差は激しく、日本でアルバイ



金 湛 [Jin Zhan]

トをしている自分の姿が出稼ぎ労働者に重なったのです。その後、厳先生の論文を読んで、農村、農民に対して興味が湧きました。学生時代は時間と資金が限られて調査できませんでしたが、就職してから農村に入ってひたすら調査しました。私の場合は農民工より農村社会、農業経済を中心としています。もちろん広く捉えて農民、農村労働者も対象として研究しています。

一九六〇年代生まれの先生方は貧しい農民工をご覧になって、一九七〇年代生まれの私は大移動した農民工を見ました。一九九〇年代生まれの川村さんは私たちと違って分化していく農民工を見ました。さらに、日本に生まれ、日本のパブル経済の絶頂期に中国に渡って、貧しい農民工を見て衝撃を受けた先生方と、平成の大不況のなかで育って高度成長期の中国で農民工を見た川村さんの感じ方と、中国生まれの厳先生と私のように、貧しかった中国を見て、日本の豊かな社会を見てからさらに中国を見た人にとって、農民工が全く違うように見えて当然

です。私たちが感じたすべてが農民工像を立体的なものにすると思います。

教育の問題

金 次は農民工子弟の教育の問題について話していただきたいと思います。

敵 皆さんの研究の経歴もご紹介いただきますでしたが、私は先ほど紹介したように、就職してしばらくの間は郷鎮企業の研究に時間を費やしました。食糧問題や農業問題にも高い関心を持っていました。農民工や人口移動の研究を始めたきっかけは九七年に国務院発展研究センターと農業部などが主催した国際シンポジウムに参加したことでした。欧米等からも多くの専門家が参加するものでした。二〇〇一年の二回目のシンポにも参加しました。

九七年のシンポジウムが終わった後に何人かで近くのカラオケに行ったのですが、そこで働く若い農民工と出会います。話をするうちに、自分たちのことが

研究されていると聞くとちよつと興奮する様子でした。一方、地元の北京人はそんな研究があるのかとピンとこなかったのです。当時の中国都市部では農民工の存在はあまり強く認識されていませんでした。彼らは九四年までは「盲流」という扱いでしかなく、九七年は秩序ある移動が提起された直後だったからでしょう。当時、農民工の権利にかかわる制度は全く整備されていませんでした。働くことは自分の意思次第で割合自由にできますが、自らの権利をどう守るのか、医療、年金等の保険制度への加入とか、子どもの教育などについては十分な制度的保障がありませんでした。

農民工の規模が急速に拡大している現実と、それに対処する制度の欠如との溝を埋めるべく、農業部等の関係機関は安徽省と四川省で大規模な農家調査を行い、上海社会科学院も上海市における流動人口の実態調査に乗り出し、膨大な個票データを集めました。他の地域、機関の専門家も様々な形で国際共同研究を行い、個票データを利用する研究成果を蓄

積しました。そうしたなか、私は上海社会科学院等の機関や個人との共同研究を始めたのです。

二回目のシンポに出た際、北京市の民工子弟学校を見学し流動児童およびその教育問題が存在していることを知りました。北京市の学校は当然外来人口の子どもを受け入れません。ところが、中国人は子どもに教育に熱心で、自力で何とかしないとイケないと思う人が多かったのです。そうしたなか、農民工の中から高卒など学歴の高い者が現れてきて、自分で学校を作って近所の子どもを集めて教育するようになったのです。もちろん、これは制度上違法行為に当たり、当局から取り締まりを受けて潰されたケースもありました。一部のメディアはこのように農民工子弟の教育問題を報道したのです。

国務院発展研究センターに趙樹凱という研究者がいて、そうした報道を読んだ趙氏は、問題の重大さに気付いたといいます。彼らは何人かの仲間を集め民工子弟学校の実態調査を始めたわけですが、

後に優れた論文を多く発表し、大きな社会的反響を呼びました。我々が見学に行った民工子弟学校は実に彼の調査対象であり、彼の手配で見学が実現できたのです。その学校は当時もかなり大きな規模を誇っており、海外から多くの寄付を受けていたそうです。ただ、その校舎は辺鄙なところの倉庫等を改築してできたものだそうで、そういうケースが珍しくはなかったと聞きました。

その後、私は上海市で民工子弟学校の調査を継続的に行ってきたいます。川村さんが最後におっしゃった状況は二〇一二年以降のことで、以前と比べると確かに大きく変わりました。二〇一〇年代初めから民工子弟学校の研究が増え続け、多くの問題が次第に明らかになってきました。義務教育制度があるなか、流動児童であつてもその子どもたちの教育が疎かにされてはいけないという社会的認識が形成されるようになったと思います。それを受け、政府は農民工の子どもが学校教育を受ける権利を保証するように関係制度の改革に着手し、二〇一〇年代半ば

から「両個為主、一視同仁」という政策に辿り着きました。つまり、子どもが親の働く都市に移動し親と一緒に暮らすこと、子どもが親の居住地の公立学校に入ることを基本とすると同時に、その子どもたちが学校に入ったら地元戸籍の子と同じように扱われなければならないということです。

「両個為主、一視同仁」という政策が実行され始めた背景に、少子化の影響で都市部の公立学校の一部が空いたことがあります。都市部の、特にその周辺の小学校の校舎を改築することで比較的少ない費用で民工子弟学校を増やすことができました。民工子弟学校に対して、教育行政は公的資金を投入し教育の質的改善を図りました。そうしたなかで民工子弟学校は徐々に成長したのです。二〇一〇年代以降、民工子弟学校はほぼ改築されており、戸籍に付随する教育の差別は少なくとも義務教育の段階では大きな改善をみています。

金　そうですね。確かに先生のおっしゃるとおり、基本的に中国の教育制度は戸

籍に紐づけられているので、都会に住んだとしても、その戸籍がなければ通常公立学校には入れないわけです。民工子弟学校、あるいは私立学校に入る場合は、義務教育としてカバーされず、補助もないので、全額自分で払わないといけないことになりました。さらに民工子弟学校の教員、あるいは私立学校の教員も政府による保障がないので、彼らの生活が非常に不安定な一面もあります。その辺に関しては川村さんも調査してきたので、どのように認識しているのか、民工子弟学校のことを簡単に紹介してもらえますか。

川村　先生方のおっしゃるとおりだと思います。農民工の先行研究においても制度の不備に対する批判が大半を占めています。ただ、近年農民工の中でも階層が生まれていますが、現在でも注目されているのは、最下層としての農民工です。上層というか、少なくとも最下層ではない農民工について語られることはあまりなかったのではないのでしょうか。特に私が調査している農民工は必ずしも最下層

という言葉では捉えきれません。私は、農民工たちは制度に不平等なところがあからこそ抜け道を作って、たくましく生きているのかなと捉えています。農民工たちは、社会保障がなかったり、自分たちで様々なものを作ってきたというところがあるので、政府からすると管理しにくい存在です。そのような枠組みから捉えてみたいとも考えています。でも、それを逆からいえば、都市住民は管理されやすい存在なのかなとも思っています。管理されやすいという一つの例としては、一人っ子政策、計画出産がありません。言葉は悪いのですが、守らなければ社会保障とか仕事とか色々なものを失うことになるという、脅しですよ。でも農民工はこの脅しの外側において、私がいとも訪問している民工子弟学校では、兄弟姉妹が三人とか四人は当たり前で、みな自由に生きています。確かに戸籍制度があつて、それゆえ苦しんでいる人たちも多いのでしょうか。逆に、自由な人たちもいるのかなと感じています。

金 先ほど厳先生のおっしゃったとお

り、政府が市民を平等に扱うことは非常に重要なことです。つまり、社会保障は市民権に基づく権利なので、都会の住民であろうが農村の住民であろうが社会保障を享受する権利があります。川村さんは違う角度から政府が社会保障を餌にして市民の自由をコントロールしているように見えています。確かに、権利と義務は同じ硬貨の両面といわれていますが、享受するべき権利と引き換えに、本来発生しない義務を強要することを許すべきではないと思います。

原田 厳先生のお話を聞いていて同感できる点は、農民工を取り巻く環境が大きく変わったことです。彼らの生活は豊かになりつつあるし、待遇もかなり前進しているのは事実です。特に、一九九〇年代からずっと農民工を追いかけているとその変化には驚かされます。ただ、初めて農民工に遭遇した時、このような変化を予測することはできなかったため、彼らを可哀そうな存在というか、彼らに対して同情しました。先ほど川村さんが言っていたような、農民工を可哀そうな

存在と捉えて論文を書いていた研究者の一人です。でも、今から振り返ると、そう思わざるを得ない状況だったとも思いますが。だから、研究者として彼らを捉えたのではなく、どう救うべきかと真剣に考えました。

私は、まず一つは教育が大切だと思いました。だから、民工子弟学校教育をすることを支援しました。当時、大学院生だったので、お金はありませんでしたが、親からお金を借りて民工子弟学校建設の資金として友人に渡しました。でも当時の上海では、学校を作ってもすぐに潰されてしまうのですが……。それから上海で2DKのアパートを借りて、一〇代、二〇代の若い農民工を集めて日本語を教えるための教室を作りました。日本語を勉強すれば、彼らの人生も変わるのではないかと……。確かに、日本語をマスターした若者のなかには、日系企業で職をみつめて一か月の賃金が三五〇元から四〇〇元になり、日本に留学するケースも生まれました。でも、当時、日本語をマスターできなかった若者はどう

なつたかという、彼らも、方法は違いますが、日本語をマスターした若者と同じように豊かになつてゐるんです。で、三〇年近い時間が過ぎて、今、彼らに会うと、みなお金持ちなんですよね。私もりもお金持ちの人たちがいっぱいいます。もちろん、厳先生から見れば、制度的な諸問題は山積していると思われるでしょうし、それを解決するのは、国家の役割として非常に重要だったという点は、とても理解できません。金先生の言われるような権利と義務の話も理解できるのですが、ただ、日本人の私から見れば、制度の問題以上に、どうして彼らはここまで上手くやることができたのかという謎に興味が尽きないのです。実は日本社会にとって最も足りないものなのではないかと痛感しています。上手く言えないけれど、昔、中国を訪れた日本人は、中国のパワーつてすごいと言つていたけれど、結局、あのパワーは何だったのか、よく理解しないまま、日本は経済的に追い抜かれていったという感じですね。

堀口 先ほどの原田先生、厳先生の話につけ加えさせていただくと、私は八九年に最初に中国へ行つた時に列車で広東、貴陽、西安などを一周しました。当時は切符を買うのがとても難しかったので半日ぐらい並んでやつと切符が買えてようやく鉄道に乗れた。次はどこに移動するかということについても、本当に移動できるのかという心配がそのときはあつたんですね。九三年に上海に短期留学した時も、まだその名残はありました。おそらく八〇年代から九〇年代初頭ぐらいまではそういう状況だったと思います。中国の農民工の方とか農村から都会に行く方も、もしかしたら外国人の私たちよりもお金を持つていない分だけなかなか難しかったのかなと。都会に出ることが一種の夢だったんでしょうね。それが一種のパワーとなつていた。

私は以前、日本の中小企業も研究していたことがあつて、日本の一九五〇年代から六〇年代という時代も、中小企業や町工場を経営してきた人たちにインタビューすると、とにかく寝ている時間がもつたいないという感覚を持つていたところが印象に残つています。おそらく、そういう時間的な感覚が当時の農民工の人たちにもあつて、今と一番違うことは、「時は金なり」という希望とか感覚とかが大きかつたのではないかと……。

そのような流れのなかで、八〇年代後半から九〇年代の郷鎮企業をずっと見てきたのですが、九〇年代に入ると所有制改革であるとか、外資系企業が入つてくることによつて、郷鎮企業が競争にさらされるようになってきます。となると、やはりそこで働いている地元の労働者と農民工が対立する。それをどのように上手く調整していくのかという問題とともに、そういう差別とか階級みたいなものが少しずつ出てきたのが、たぶん八〇年代後半から九〇年代ぐらいの流れではないかと思ひます。

私も厳先生と同じように人口の動態を観察しているのですが、当然、上海とか北京ではすでに少子化が始まつていて、日本以上に少子高齢化が進んでいます。農村においても九〇年代から、少子化

と、もう一つ顕著なのは農村女性の高学歴化ということです。高等専門学校や大学、あるいは大学院に行く。自分のお父さん、お母さんが農業戸籍であるというような人たちが、九〇年代から二一世紀に入る頃を境にして高等教育を受けるようになってきています。当然、中国の大学もそれに合わせて増えていくんですけども。その学生の一部は日本にも留学していて、私の研究室にも、両親は農民なのですが中国で大学を出て日本語を勉強して日本の大学院に入りたいという人が訪ねてきているのです。やはり中国の農村部においても良い意味でも悪い意味でも、ある程度、金銭的な余裕が出てきて、農村女性の高学歴化であるとか少子化というものが、都市の層を含めて出てきているのではないか。それが農民工の特徴にも変化を与えてきているような感じがします。それについては、また後ほど議論したいと思います。

金 農民工の経済状況という話が出ましたが、例えば日本の場合は戦後、集団就職で地方から都会に入ってくる労働者も

そうでした。私は彼らについて研究したことはなく、感覚でいえば、その就職によつて社長にまでなることは難しい、つまり労働者という地位が変わることはなかなかないと思います。東南アジアを見ても農村からの労働者が都会に入つて、もちろんビジネスに成功する人もいるのですが、残念ながら中国のようなダイナミックな経済的地位の変化はないと思います。もちろん彼らには本来労働者として期待される役割がありますが、彼らは労働者としての役割を果たしながら、制度と市場を上手く利用して自分の地位を変えるように常に努力していると思います。二元構造の中で農民工は3Kまたはその下請けとしての位置づけが当初ありました。インフォーマルセクターの労働者として雇われ、沿海地域の場合にはフォーマルの労働者として採用される場合もあります。彼らは学歴や戸籍などの制限によつて社会の底辺としての存在ではありませんが、働きながら多くの農民工が何らかのかたちで資本蓄積をして、ビジネスを展開しているのではないかと

思います。そこが中国の農民工と他の国の農村労働者の違いです。

農民工のパワーの源

金 先ほど原田先生がおっしゃった農民工のパワーの源を再考することには意義があると思います。私がかつて住んでいたアパートは建設時に農民工たちがインフォーマルセクターの労働者として雇われていました。怪我をした場合は何の保障もなく、当然病院に連れて行ってもらうこともなく、むしろ怪我した農民工はその瞬間に仕事を失うことになりました。そこも彼らと都市住民との違いです。その一方、彼らは非常にパワフルです。そのパワーの源の一つは保障がない、つまり逃げ道がないことも考えられますが、それだけでは持続することができないと思います。

原田 パワーの源というか、少なくともそれを支えるのは地縁・血縁者ではないかと思います。労働力の移動を中国と日

本で比べると、決定的に違うのは地縁・血縁者との関係です。上海で農民工を見ていると、地縁・血縁者で部屋や仕事を探したり、夜になれば集まってお酒を飲んだり、肩寄せて助け合いながら生きていました。それと同じように彼らは、お金の貸し借りをするんですよ。その点は三〇年経った今でも変わっていないでしょう。でも日本の場合、高度成長期以降、労働力の移動が進んで、三〇年近く経った時点で、地縁・血縁者との関係は残っていたのでしょうか。例えば、中国の友人のスマホを見ると、血縁関係者はしっかり登録されていて、兄弟だけではなく従兄弟で作ったWeChatのグループがあったりします。私など、従兄弟が父方と母方を合わせて八人いますが、電話番号も知らないし、このうちの半分は街ですれ違ってもわかりません。それに比べると、農民工が故郷を離れてもう随分と時間が経っているのに、関係性が崩れないのはすごいと思います。

特に、お金の貸し借りについては驚かされています。例えば、一番初めに感心

したのは、一九九〇年代の初めごろ、山東省から来てオートバイタクシーで生計を立てていたあるグループのことです。もともとは一人が中古のオートバイを買って始めたのですが、当時、郊外に行くバス路線も少なかったから、意外と儲かったんです。そしたら、グループ内でお金を貸し借りして、次々にオートバイを買っていったのです。もちろん中古なのでしょうけれど。でもしばらくすると、同業者が増えて儲けが少なくなる。そうすると今度は、お金を借りてトラッ



原田忠直 [Harata Tadanao]

クで商売を始めるんです。山東省の野菜を上海に持ってきて、上海から生活用品とか、中古の家電製品などを運ぶ仕事です。知らぬ間にトラックの台数が増えていくんですよ。地縁・血縁のネットワークというのは、お金の貸し借りとか、お金を少しづつ貯めて、グループの中の商売に才がある人に皆が投資するんですよ。優秀な人間がいたらその人にお金をかけて稼ぎをバックしてもらおうという感じでしょうか。もちろん、農民工に限った話ではないと思いますけれど。いずれにせよ、農民工が農村から都市に出てきて制度的に何の保障もないなかで、市場の中でどうやって生きていったか、といえば、やはり地縁・血縁者の存在抜きには語れないと思います。言い換えれば、銀行が貸してくれるわけではないなかで、地縁・血縁の中でのお金の貸し借りというのは、確かにセーフティネットであるし、互いに投資しあっていたという視点は非常に重要だったのではないのかと思います。

金 なるほど。確かに都会ではなかなか

見ませんが、今でも中国の農村に行けば、家を建てる時、足りない分を親戚だけではなく他人から借りることが一般的です。日本人の感覚ではこのような行動は見られませんが、中国の場合は全く普通です。

原田 そう。普通すぎて問題にもならないでしょうね。でも、農村から出てきた人たちが「悪魔の挽き臼」にすり潰されていくというポランニー (Karl Polanyi) の話がありますよね。日本の研究者の中にも農民工というのはまさにすり潰されていく人たちだと捉える研究者も少なくないと思います。でも、実際、彼らは、地縁・血縁者の中にいれば、すり潰されるようなことはなかったのではないかと思います。そのうえ、投資先としてのお金を集める機能があったから、農民工に得体の知れないパワフルさを感じ続けることができるのではないかと思います。ただ、工場で働いている農民工は、地縁・血縁者とは無縁と思われがちですが、例えば、深圳の工場で働いている若い女の子たちは、稼いだお金をどうして

いたんでしようね。もちろん、故郷に送りをしていたでしょうし、生活用品や電化製品などを持って帰ってもいたでしょうが、投資資金だったケースもあったのではないかと想像しています。

敵 原田さんのおっしゃることはよくわかります。フォーマルな金融制度がきちんとできていないからコミュニティで補う程度だと思えます。温州の民間企業を三、四回調査したことがあります。そこは民間金融がとても発達した地域で、それによって地域経済が支えられたという話もあります。ただそれは全部ではないんですね。政府、市場、コミュニティの三者はそれぞれ役割分担をしています。地域や時代によって変わったりするわけです。温州は特に民間金融が発達し、農民工の中に成功する人もたくさんいる。階層固定化という問題もあります。成功した者も多いけれど、割合から言うとそれほどでもないんですね。親と同じ階層に留まる人が多い。親も農民工だったりするケースがいっぱいあります。江蘇省の地方の町で二〇代の子世代を調査し

たことがあります。農民工の第一世代を親に持つ彼らは子ども時代を故郷の祖父母の下で過ごしたケースが多いのですが、今度は自分たちの子どもを田舎の両親に世話してもらったりするわけです。中学か高校を卒業した後に都市部に行った若い世代ですが、医療保険、労災、年金などは親世代とは確かに違います。職業階層では親世代とそう変わりません。

制度の問題もあると思います。親が農民だったために農民工と呼ばれる人がたくさんいるわけです。実際、高卒、中卒で都市に行って成功した人もたくさんいますし、農民工と言われて違和感を覚えるケースもあります。農民工と戸籍の関係を考えてみると、農民工は一つの階層ではなく、制度による農民差別の現れだといえます。実態としての農民工とその家族、制度での扱い方を分けてみる必要があります。制度的には、例えば戸籍の転出入が制限されているために移住ができない、それが故に上海市で暮らして五年、一〇年経っても上海戸籍の住民と同じ権利がない。

もちろん、大きく変わってきたことも

あります。人口移動が制限された時代には最初は何の保障もありませんでした。しかし、労災が発生すれば賠償などの問題があります。そこで、民間企業でも農民工を雇ったら労災保険に入っておこうというようになりました。二〇〇二年頃から労災、医療、年金をまとめて総合保険という形で農民工向けの保障制度が作られ、さらに、二〇〇〇年代後半に入ってから、労災保険はもちろん、医療保険、養老保険といった都市住民向けの社会保障制度も農民工に適用されるようになりつつあります。ただ、失業保険および住宅積立金制度への加入は今のところ依然としてありません。実際、住宅積立金は都市住民にとって大きな貯蓄です（住宅積立金とは都市労働者が住宅を購入、修繕することを想定した積立貯金のこと、積立金は労働者本人の負担分と企業の負担分で構成される）。農業戸籍と非農業戸籍の区別がなくなるとして、大都市への戸籍転入が制限されるなか、農民工は制度的に差別され続けてい

ますね。

もう一つ、戸籍が関係する教育の話に触れておきます。上海市や北京市という大都会での定住や移住は厳しく制限されています。農民工の子どもは、「両個為主、一視同仁」政策から守られています。数年前から外来人口の規模を抑制する動きが出ています。親の滞在期間や保険の加入年数といった子どもの入学要件をより厳しくすることで、子どもの上海での就学ができなくなります。結局、やむを得ずに帰郷する子どもと一緒に、出稼ぎの親も上海市から姿を消すことになっていきます。

上海市に残った子どもは割合に優秀な子が多く、地元の子よりも成績がいいです。しかし、彼らの就学は中卒まで、上海市の普通高校には進学できません。普通高校を出た人は上海市で大学受験ができ、上海戸籍の子どもと教育資源を奪い合うこととなりますので、地元住民から反対されるのです。結局、農民工の子どもは上海に残りたいなら上海市の職業高校に進学するしかありません。大学受

験を考えているのなら、故郷への帰還を選択せざるをえません。中学を卒業してから帰郷したのでは故郷での大学受験に間に合わないから、中一、中二で上海の学校をやめていく人が多い。これは農民工に対する厳然たる制度差別とっていいと思います。ただ、それは、北京や上海という一線都市で見られる現象で、省都等の二線都市を除くと大きな変化も起きています。大学入試の場合でも、戸籍が湖南であっても安徽で受けられるようです。

原田 厳先生が、差別というか、違いのなかに問題を見出すことは当然だし、重要な指摘です。ただ、私から見ると、別に大した差別ではないのかなと思えてしまうのですよ。もちろん、以前は良くないと思っていたのだけれど、今、中国を俯瞰してみると、たとえ差別があっても上手く生きていく農民工は少なくないし、繰り返しになりますが、不条理な状態のほうが、地縁・血縁者の関係性は残存していくのではないのでしょうか。不条理ゆえの結束力です。まあ、皮肉の結果

と言えば皮肉の結果なのですが。もちろん、厳先生が研究的な立場から批判するのは必要だと思えます。ただ、日本人の研究者として、そのような立場にあえて乗らなくてもいいかな、と考えています。かなり身勝手な言い方ですけど。それに、日本の経験を踏まえると、保障の充実が必ずしも良い社会を形成するとは限らないかもしれないと考えています。少なくとも日本社会の歴史をみれば、社会保障の充実と地縁・血縁者の形骸化は、無関係とはいえません。むしろ一度解体してしまつたら、それを戻すというよりも、簡単に再生することは非常に難しいでしょう。

金 壁を作れば必ずどこかに抜け道ができるというのは当然そういうことになるんですね。社会保障が不十分であれば負の一面はもちろんありますが、人間の潜在能力を発揮させる一面もあります。農民工になる人は基本的に農村の若い労働力です。社会保障が享受できない環境にあるからこそ潜在的なパワーを発揮したことが考えられます。しかし、私は農村

に対する不平等な社会福祉の配分を正当化するつもりはありません。後半では社会福祉について皆さんに議論していただきたいと思えます。

戸籍制度と土地所有

金 農民工が農村を離れる場合、まず戸籍の問題と土地の権利に関連する問題に直面します。これらの問題について、皆さんはどう見えていますか。

原田 中国の場合、都市化の問題について大都市とそれ以外の都市とをひとくくりにして語ることはできませんが、中小都市を中心に都市化は進む方向でしょうね。ただ、いわゆる三線、四線都市で積極的に都市戸籍を渡すことになつても、農民工が乗ってくるかどうかは疑問です。地方都市だから嫌だというわけではなく、故郷での土地使用権も簡単には捨てられないのではないのでしょうか。実際、都市化のなかで、子どもには教育のことを考えて都市戸籍を得ても、自分の

戸籍は農村に残しておきたいという人たちの声をよく聞いたりします。これまで戸籍問題を海外から非難されてきた背景からいえば、都市化政策は、中国の政策的にはとても良いことなのだと思いますが、農民工の視点からみると一筋縄でいかない面も多々あると考えています。

敵 戸籍に関しては先ほど触れましたが、二〇一四年から農業と非農業の区別を徐々になくしていく方針が決まっています。それ以来五、六年経っており、戸籍の一本化改革は大きく前進しています。それは大きな進歩だと思います。

もう一つ注目すべきは、皆が戸籍を都市に持つていくかというところではないことです。おつしやるとおり、戸籍を田舎に残しておく人たちが増えています。なぜかという点、土地制度改革が関係しています。土地請負法が施行された二〇〇二年以降、農家は戸籍を県城の上位の市に移さない限り、その土地請負権が保持できます。二〇〇九年に土地請負法が改正されましたが、その点は変わっていません。一昨年、二回目の法改正が行わ

れました。改正後の土地請負法では土地の所有権、請負権、経営権を分離して、請負権を持ったまま経営権を譲渡するところが認められているだけでなく、戸籍を県城の上位の市に移していても請負期間内の請負権は残ります。農家の実質的な地主化といっても過言ではありません。そうすると都市部に行っても自分の土地を持つことができるのです。

原田 その代わりに経営権を動かすということになるわけですね。

敵 そうです。地主として地租を取っています。それで土地が流動化して大規模経営ができていますね。最近の動きです。保険制度も関係しています。二〇〇〇年代前半から農村新型合作医療制度が普及し、二〇〇〇年代末から農村養老保険制度も導入されています。今の農村住民はほとんどがこうした社会保障制度に加入しています。ただ、都市住民との間に大きな格差が存在し、特に養老保険に關しては、今のところ、任意で加入することになっています。保険料をたくさん払っておけば将来受け取る年金も多くな

ります。ただ、以前は加入しておらず、加入年数が短い人たちの年金は非常に少ないです。農村では、現在六〇歳以上の人たちが大体月額一〇〇元、年間一〇〇〇元ほどもらえますが、都市部はそれよりも高い。けれどもこれから歳を取っていつて年金生活を送る人たちは、都市と農村を問わず、保険料の納付期間と金額に応じて年金を受け取ることになりなす。結果的に戸籍の持つ意味が徐々に少なくなりす。その点も高く評価しています。

原田 中国の戸籍というのは、社会保障の問題と土地の問題の二つが複雑に絡み合っているのでしょうか。ただ基本的なところは、まだ戸籍が土台となっていると思います。だから都市化問題とは、農民工が、もちろん農民を含めて、都市の戸籍を取得するのかしないのか、という選択の問題になるのでしょうか。これは農民工にとって非常に難しい選択です。だからというわけではありませんが、私は二重戸籍を認めるべきだと思っています。もちろん、こちらもあり現実的ではな

いかもしれませんけど。

川村 農民工が戸籍の選択で迷っている状況はあると思いますが、都市化が進んでいるのも事実です。そのようななかで、中国政府は都市化率を最終的にどの程度に想定しているのでしょうか。

敵 目標は二〇二〇年に六〇%。今年です。

原田 六〇%になったんじゃないかな。

敵 今、五八%を超えていますね。

原田 ほぼそれに近づいているんですね。

金 中国経済は二元構造のなかで都市が明らかに農村を搾取しています。農業に従事する人たちには社会福祉を享受する権利がありません。農産物の値段が抑えられ、それによって都市住民の配給制や社会福祉制度が維持されてきました。現在進められている保険制度も農民を利用しようという目的が考えられます。大数の法則に基づいて、都会の人に限定するよりも農村の人と一緒に市場に入れたほうが合理的で、保険として成り立ちます。先ほど敵先生がおっしゃっていた土

地移転の問題ですが、二〇一七年に中国の土地移転のなかで請負権の移転はわずか二・八%ぐらいです。それ以外の人たちは請負権を売らずに経営権だけを誰かに渡しています。つまり、地主の身分を維持しているのです。それによって戸籍制度はどうなるのでしょうか。

原田 一つの農地に、たくさんの権利が生まれているというか、革命前の「一田二主」のような一つの農地に二人の地主が生まれている状況になっていると思います。農民はあくまでもプチ地主ですけれど。地主となった農民が簡単に農村戸籍を手放すことはしないのではないのでしょうか。経営権は誰かに渡すでしょうけれど。こういう農地利用と同じように、先ほど言った、一人に二つの戸籍があったほうがいいのではないかと考えてしまいます。

敵 戸籍とは関係ない。
金 権利の問題です。

原田 ただ、第一世代の農民工はいいけれど、第二世代に都市戸籍だけを与える、農村で次世代を担う人がいなくなっ

てしまうでしょうね。

敵 人だけではなく組織だつてなくなる。多くの地域で自然村がなくなったり行政村も消えています。そこで将来の所有者は誰ですかというところが大きな問題ですね。

原田 それが一番大きな問題だと思います。

金 後継者の問題が出てきます。

原田 だからというわけではないですが、子どもにも二つの戸籍を渡しておく、誰かが戻るかもしれないと思えますけれど。

金 戸籍制度自体をなくせば自由にできるんじゃないかな。

原田 確かに、そのような方向に向かう可能性は否定できませんが、中国は、良い意味でも悪い意味でも、地縁・血縁者にかなり依存している社会ではないかと思えます。まあ、なくすか二つ保有するかというのは、机上の論に過ぎません。

敵 今の制度では土地の請負期間は三〇年です。二期目が終わりに近づいて三期

目も始まるうとしていますが、それも三〇年と決まっています。そのことについてあちこちで聞きましたが、大体、行政村の範囲でやっているようです。割合嚴格にやっています。例えば、二〇二〇年から始まる三〇年の請負だと、土地の再分配はこの年に戸籍がそこにある人だけを対象とします。いったん決まったら、三〇年は請負権を保証されるわけです。その間に人が亡くなったりする、生まれたりする、あるいはどこかに行ったりすることがあっても、請負権は変わりません。

原田 ただ、「割替え」というか、村内での再調整を禁止しましたよね。

敵 いや、地域によりますね。制度的にはそれは駄目だということけれど。

原田 わかります。こっそり隠れて皆でやりますけどね。

敵 制度的には請負期間内の調整は駄目ですが、村の中で請負権の調整をするケースもあるし、地域によってはやらないといけないこともあるようで、実際やっているところが多いようです。将

来、世代が変わると、戸籍が都市に移されて村から人が消えてしまいます。さらに、土地を所有する村も消えてしまいます。すでにたくさんの村が消えています。そのあたりについて、制度的にどうすればよいかはまだ議論されています。

原田 それはできないかもしれない。

敵 土地の所有権は大きな問題ですね。

金 私有化することですか。

原田 私有権にしたなら、ますます問題は複雑化するのではないのでしょうか。

敵 一つの方法として土地を私有化して、都市に移った人は自分の土地を誰かに譲渡したりする、土地の流動化が進めば大規模経営もできる、そういうシナリオも考えられますね。ただ中国では土地の私有制はあり得ないかもしれません。

原田 あり得ないでしょう。社会主義ですから。

金 では、請負権を無期限にする。それによってほぼ私有化ということになります。そうすると戸籍にしぼりが必要なくなるわけですよ。

敵 でも人が消えてしまう場合がある。

金 人が消える場合は親から子どもに相続できるわけですから。子どもがそれ以外の場合は誰かに転売するとか。

敵 そこは制度の問題で議論してもしょうがありません。今、戸籍制度改革、都市改革によって都市化が急進しており、土地の流動化に伴う大規模経営が増えつつあります。これは今の中国農村で広く見られている実態ですね。

原田 それはある意味、社会主義の理念にもあまり抵触しないで上手い具合にやっているとします。一応、集団所有というのはきちんと守られているし、社会保障としてのブチ地主のようなものが生まれたりしています。

敵 同時に面白いのが村単位で合作社がたくさんできています。土地の集団経営です。

原田 その経営権を皆に渡すということですよ。

敵 そうです。集団所有だけれど、請負権は農家もち、経営権は企業や大規模農家に集中しています。

原田 それが今の中国ではとても良い方法だと思います。

金 企業に貸して大規模経営をする合作社が結構増えています。もちろん地域によって向き不向きがあります。例えば湖南省の山間地域で大規模経営をやるうと思ってもできません。その場合は村で稲作をするとか、あるいは集団転作のほうがいいです。

敵 できた理由の一つは田舎に若い人がいなくなつたことです。

金 今、中国の農民の子どもは農業がでない。農村に住みたくない。仕事がない。でも都会に留まりたいという気持ちが強いです。社会全体的に、特に人口統計的にみれば、中国の構造転換が進んで美しく見えますが人口流入することに比べて、農村社会福祉の問題はすでに顕在化しています。

社会福祉

堀口 将来的な話は後ほどするとして、

現状の社会的な問題として土地問題や経済的問題が議論されているのですが、もう一つ重要なものに「留守児童」という問題があります。例えば、六千万人とか七千万人の子どもたちが親と離れて暮らしているといわれています。また「空巢老人」といわれる独居老人が増えています。今後、中国は日本以上に少子高齢化が進むだろうと考えられます。それと認知症の問題。最近、中国の大学で認知症について報告したのですが、中国人の先生活の関心が高かったことに驚きました。中国の介護保険も始まったばかりで、手遅れになるのではないかと。これらの問題は、都市部・農村部を問わず、すでに進んでいるのですが、このまま放置していると、例えば今後、留守児童が青年期、壮年期を経ていくと、親との関係や教育の問題によって、高度な人材育成に影響が出てくると思われれます。これを将来的にどのように改善していくのか、具体的に議論していかなければならぬと思います。川村さんはこのあたりのこと、教育の面にとっても関心があるよ

うですね。

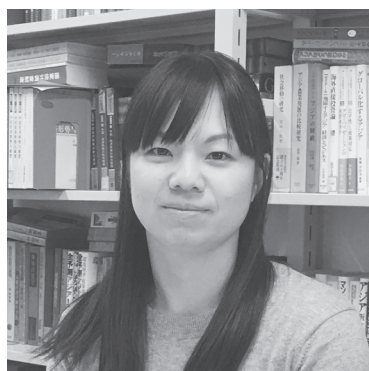
親が出稼ぎに行つてある程度のお金は貯まったかもしれない。全体的にはまだまだとはいえ、一部分の農民工はある程度、経済的に豊かにはなった。けれども今後二〇年、三〇年後、第二世代、第三世代の子どもたちが成長する段階において、留守児童の問題や、高齢化のなかで自分たちの親の世代をどのように介護していくのか。社会保障や介護の問題は避けて通れないのではないのでしょうか。

原田 通れないですね。

堀口 人口が日本の十倍ということは老人も十倍いるということで、日本でさえアップアップの状態なわけですから、良くも悪くも日本をひとつの参考にして、中国国内においてもしっかりと研究活動をしていかないと、今のままで弱いのではないかと思います。そのあたりはいかがですか。

川村 これまでの調査は、民工子弟学校を中心にやつてきているので、留守児童については手つかずの状態です。

介護については、二〇一八年に民工子



..... 川村潤子 [Kawamura Junko]

弟学校に通わせている子ども親にアンケート調査をしました。回答者が、三代、四〇代が九割弱ぐらいだったので、彼らの親はまだ元気な世代ではあるんですが、今後の親の介護について質問をしました。結果をみると、介護の問題はそれほど深刻に受け止めていないようです。もちろん、まだまだ両親が元気だということもありますが、それ以上に、現在でも彼らは親に生活費の仕送りをしており、介護が必要になったら生活費が介護費に変わるだけで、金銭的な負担がそれ

ほど高くなるというわけではないようです。さらに、この世代は兄弟数が多いので、一人当たりが負担する額も少なくて済むと考えているようです。また、親の介護が必要になったら、故郷に戻ると考えている人が半分近くいました。まだ自分が故郷から出てきた世代なので、帰郷するという考えがあるようです。もちろん、実際に帰るかどうかはわかりませんが、帰る気はあるのだろうかと思っっています。ただ問題は、まだまだ先の話ですが、その子ども世代のことです。都市生活が長い子どもたちは親の介護をどのように受け止めているのか、このあたりは非常に気になっています。故郷へ行ったことがない子どもが大半です。その子どもが親の介護のために帰ることはなさそうですね。兄弟数が多いといっても少なくともなつてきてるので、負担は大きくなつていくのかと予想しています。ですから、介護問題はこの次の世代で大きく問題になってくるでしょうね。もちろん、その頃には、現在の子どもたちは、都市戸籍になっている可能性もあるの

で、都市の介護問題というか社会保障が、今以上に重要になってくるのではないのでしょうか。

堀口 留守児童と言え、故郷に残された子どもたちと、もう一つ、流動児童とがありますよね。そういう点でいうと、流動児童は都会で生活しているので故郷に戻れない。

原田 故郷がどこにあるのかわからない農民工の子どもは少なくありません。

堀口 そういう人たちの親が老後を迎えるのは三、四〇年後ぐらいですね。二〇四〇年から二〇五〇年ぐらい。ということとは、逆に言えば、そのときぐらいまでに何とかすれば、中国の高齢者介護の問題というのはまだ防げるという準備段階にあると言えるんでしょうね。

原田 一つはやはり先ほど言ったように、介護は家族や地縁・血縁者を中心にやるのが崩れないような政策をうってあげば大丈夫だと思います。

金 人口的に考えれば、基本的に公的機関に介護を委託するということは中国、特に農村の場合はあり得ないことです。

条件の悪い山間地域では大きな病気にかかった場合の死亡するリスクは高くなります。健康な年寄りの場合は長生きしますが、心臓病や高血圧などの疾患を持つ人や癌の発見が遅れる人もいます。実際のところ、彼らの介護に必要な期間は非常に短いです。日本で想定される長期的な介護は、中国農村では少ない印象があります。

川村 政策といいますが、目標のようなものとして、九〇%が在宅介護で、七%が社区、いわゆる地域コミュニティで、三%が老人ホームなどの専門医療施設とよくいわれますが、この割合で今後、介護はできるのでしょうか。

金 農村に人がいなければ、結局無理でしょう。

川村 都市も無理ではないかと。一人っ子政策の弊害というか、どうやって介護していくのか疑問です。実際、専門医療施設が中都市や農村とかにできていくわけでもないと思います。二〇一四年に民工子弟学校の校長たちが数名、日本の専門医療施設を見学しに来ました。そのア

テナンドをしたことがあるのですが、彼らはすでに土地も購入し、どのようなサービスが 필요한のかを日本の施設を参考にしたいと話していました。しかし、一向にその施設はできそうにありません。現段階では必要性がないのか、商売になりそうにない状況なのかはわかりませんが、いずれにしてもすぐに創設できない何かがあるのではないかと思っっています。

金 かなり大きい問題になります。都市の場合は貧富の差があるので、介護労働に従事するために農村から都会に移動する人がいます。逆はあり得ないです。

原田 先ほど川村さんが紹介した調査結果をみると、年寄りを農村から都会に移住させるケースは結構ありました。確かに二割ぐらいがすでに呼び寄せている。もちろんそれは介護で呼び寄せているのか、子守で呼び寄せているのか、ちょっとわかりませんが。

金 子守が多いです。
廠 天津滞在中、住まいのアパートからそういう光景をよく見ましたね。主に若

い教員が住むアパートですが、子どもの世話をしてもらうために親を呼び寄せている感じです。彼らの喋っている方言を聞くと、どうやら全国各地から来ているようです。中国では、女性が五〇歳か五五歳、男性が六〇歳に定年退職し、年金生活者となります。身体的に元気な人が多く、忙しい我が子に代わって、孫世代の世話をしているという感じです。若い女性の就業率が高い背景にはこのような事情も影響していると思います。

原田 確かに現状では子守が多いと思います。ただ、最終的に都会の方が介護面で良いサービスを提供できるでしょうか、そのまま残るかもしれないと考えています。

金 愛知大学の学生が、中国女性が結婚相手に求める条件をネットで調べてみたところ、一位は高級車に乗っているかどうか、二位は家を持っているかどうか、三位は出身地でした。日本人はそれを理解できないと思います。ゼミで議論した結果、中国人留学生が親の介護のためではないかという答えを言いました。女性

が男性のところ嫁ぐことを考えて、自分と結婚相手の出身地が同じであれば、自分の親の面倒も見られるわけです。

原田 そのような数字というか、調査結果はあるんですか。民工子弟学校の親たちが同郷のケースは多いとは思いますが、介護を視野に入れてるわけではなく、これまでは言葉や食事の面などの習慣がそうさせていると思います。日本の場合も確か一九六〇年代か七〇年代ぐらいまでは同郷の人との結婚率は高かったのですが、ただ、移動によってそれはなくなっていきました。中国はその点、移動先で出身地の異なる人と出会うケースは増えているはずですが、相変わらず同郷人と結婚するケースが多いと思います。この点は介護の問題をみるうえでとても重要だと思えます。

金 子どもの場合はケースバイケースです。小さい時には親と一緒にいて、ある程度大きくなったら故郷に帰る人もいれば、小さい時に祖父母と一緒にいて、進学する年齢になったら親のところに行く。両方が見られます。

原田 留守児童というのは、地元では故郷の小学校の寮などに住んでいたりしますよね。留守宅という父親と母親がいなくなつた家に住んでいるというイメージがあるけれど、寄宿舎に入れられていくケースが多いと思います。

敵 私をこれを専門的に調査したことがありません。聞いた話によれば、祖父母に世話をしてもらつたケースが多いそうです。お母さん、お父さん、あるいは両親が共に出稼ぎに行つた場合、子どもは祖父母と田舎で暮らすことになります。食事など生活の面倒は祖父母が見られますが、教育までは無理ですね。そこで、小学校の中に寮が作られ、子どもたちは幼いながら、寮生活を送らざるを得ないことも多いようです。

もう一つ注意すべきは、この間、村にあつた多くの小学校、中学校が消えていることです。政府は町に大きな学校を作り、子どもたちを集めて義務教育を進めています。背景には、村にあつた学校の跡地を耕地に戻すことで、都市開発で転用された農地の面積を補填できることが

あります。小中学校を集中させることで町の周辺で不動産開発を拡大させ、地方政府は莫大な財政収入を手にすることができるようです。

金 税金を徴収する目的で集中させているのですか。

敵 土地財政です。農民工は出稼ぎからの収入を県城のアパートの購入資金に充てますが、そのアパートに学校に通う子ども、および子どもの世話をする両親を住ませたりしています。その深層に見事なトリックが潜んでいるように思えます。政府が学校を町に集中させた結果、学校に通う子どもは田舎を離れて町のアパートに住まざるを得なくなり、そのアパートを購入するために農民工はコツコツ貯めた出稼ぎ収入を使わざるを得ませんが、購入代金の相当部分は実に地方政府の財政収入として吸い上げられているのです。

原田 わかります。

敵 流動児童や留守児童についての報道などでは惨めだとか可哀そうだというのが多く見受けられます。親と一緒に暮

らせない児童が数千万人にも上るという現実を決して良いものではありません。しかし、子どもたちと話をしてみると、特に何とも思っていない子も多いようです。学校に通い、一生懸命勉強し、高校に進学し、さらに大学受験に受かつている人も多いですね。辛い環境のなかでも勉強に励み、大学に進学することもできるという現実を考えますと、複雑な気持ちになります。農民差別だとか、留守児童が大変だとか、問題も確かにあります。にもかかわらず、勉強する機会が保証され、しかも、きちんと勉強できた人は大学に進学することも珍しくはないのです。

堀口 そうすると、農村のことを知らない子どもたちがますます増えてくるということですよ。留守児童はもともと、自分の生まれたところ、親が住んでいたところで育つていったはずだけれど、彼らはもう農業を知らない、農村での生活もわからない……。そういう状況で、だんだんと町の学校に移り住んでいくのですね。

原田 中小都市に集められるわけです。

堀口 どこまで広がっているかわからないけれども、そうなるとますます、今の農村の若い世代というのは農業とか農村のことがわからなくなるかもしれない。そういう農村と都市の発展をどう考えていくのかという問題のジレンマが出てきているのでしょうか。

敵 私 は田舎で生まれ育ちました。大学に入るまでの二〇年近くの間、村の中心の周辺のすべてが頭の中に焼き付いていて、今でも鮮明に覚えています。村の周辺の広大な農地、池、用水路などがすべて頭に入っています。ところが、今の子どもたちは農民工、農民と言われても、そのような感覚がないでしょう。農民工のことを語る際、農民から転身してきた者と、彼らの子どもを分けてみる必要があります。現状では、親は農民だから、その子も同じように農民工と呼ばれていますが、若い世代の彼らは農業とか農民とは一切関係ないはずで、勉強して大学に入って成功した人もたくさんいます。原田先生がおっしゃったようなケースも

少なくありません。

原田 そうですね。農業や農村の問題、地域社会の問題を考えると、敵先生が言われたように結構流動化が進んでいて大規模経営も生まれている。さらに、都市から意外とお金が落ちてくる。なかには、農民工で一旗上げた人が故郷へ戻って投資して農業生産に関与しているということもあるけれど、それは基本的にまだ多少なりとも農村に労働力があるからなんです。その世代がいなくなると、集落が消えていくことになるでしょうね。日本にはそのような事例が山のようにあります。特に農村の学校が統廃合されると集落は一気に消滅していきます。金 地域の存続と人口再生が維持できなくなるんです。堀口さんは中国の沿海部も見て、内陸部も結構見ているじゃないですか、その違い、特に内陸部の状況についてはどう思われますか。

堀口 まさしく今、原田先生がおっしゃっていたように、小学校がなくなるということと同時に行政単位がなくなるという事です。行政単位がなくなると生活面での支援や手当ができなくなっていくので、当然、昔の日本のような挙家離村して町に出ていくといった現象が、いよいよ中国でも起こってくる。都市は栄えたとしても農村はどうなるのかといった問題が、今後はより一層クローズアップされてくるでしょう。最近、農村振興に中国の中央政府も力を入れていきます。具体的にどうしていくのか、あるいはもう少し小さな単位で村を再構築していくべきなのかという議論が、これから出てくるような気がします。日本の過疎化の問題も含めて、互いに共同研究していく意義が、今後より一層重要視されていくのではないかと思います。

原田 同感です。先が見えないということ。都市化、都市化といっても、その後には様々な問題があると言いたくなります。

金 これまでの戸籍制度の下では農村労働力が都会に移動しても、戸籍に縛られるため彼らは農民工という身分で働くし

かありませんでした。現在、戸籍制度が緩和され、階層分化が進み、農民工は身分制度と階層分化の間を生きています。この先、彼らはどこに向かっていくのでしょうか。川村さんが話したように、農民工時代の彼らは、確かに保障もされないうが自由でした。今、彼らは自由と社会保障による管理の間である程度選択できるようにになりました。今後、都市住民になった場合、彼らは社会保障を享受する管理社会の一員になるのか、自由の状態を維持するのか、彼らがどのように選択していくのかはわかりませんが非常に注目すべき点ですね。

市民社会

金 次は農民工の将来について話したいと思います。

敵 農民工という言葉がまず消えるように期待したいと思います。農民工は階層ではなく、身分です。農民工の中には企業経営者もいれば、一般労働者もいま

す。そもそも農民工という言葉自体は差別的な意味合いを色濃く有しており、早くそれをなくするような努力が必要だと思います。この用語が使われなくなった後はどうなるかという点、この集団を構成する様々な階層に着目し、中国の階層社会の中でそれを見ることになるでしょう。

中国政府は今年中に、農村の絶対的貧困を撲滅し、全面的小康社会を実現すると繰り返し強調しています。これは所得の最も低い底辺の人々に着眼した対策ですが、中国社会の抱えるもう一つの側面、つまり都市・農村間、地域間、あるいは、異なる職業の間で大きな所得格差、資産格差が深刻化しています。しかも、このような階層間の格差がかなり固定化しています。親子の間でも職業階層、収入などで越えがたい壁ができています。

本 来、個々人は自らの能力や努力で社会的、経済的地位を上げることができれば、社会は活気に溢れる開放的な状態になるのですが、反対に、どんなに努力し

ても、家庭環境つまり親の学歴や収入によって結果が変わるのであれば、当然人々はやる気を失ってしまいます。それで社会は努力すれば何とかなるのではなく、どんなに頑張ってもどうにもならないような閉鎖的なものになってしまいます。

残念ながら、今の中国は少し前の開放的な社会から閉鎖的な社会になりつつあります。戸籍制度改革で農業と非農業の違いがなくなり、農家の人たちにも医療や年金制度を適用することは大きな進歩といえますが、絶対的貧困がなくなった後の中国は、農民、農民工などの相対的貧困、つまり深刻な経済格差問題に正面から取り組むべきです。そうすることによって初めて市民社会が実現可能となります。

金 先ほど私は身分制度と階層分化の併存について申し上げましたが、農民という身分が付けられているため、それは分化されていない身分制度ですね。今後向かうところは、一般市民として統合されて一元社会となった時に、中国全体の階

層分化が進むことによって農民工という集団が消えるわけです。枠が消えて、市民の階層分化のなかの一部となっていくことです。

川村さんの今までの調査では階層が流動的に見えませんでしたね。先ほど厳先生の話されたように日本よりは流動的なのですが、川村さんが見ていた農民工の親の階層の流動性については、どのように認識されていますか、実態をどのように考えていますか。

川村 階層は流動化していると思います。親よりも高学歴化しているとか、逆に学歴が低くとも、這い上がっていきける梯子のあることが、重要だと思っています。特に私は、梯子の存在に注目しています。例えば、地縁・血縁者の集まり、同業者の集まり、簡単にいえば、飲み会などを通じて、色々な人と出会っていくなかで梯子を探して、経営者になっていくケースが少なくないと思っています。厳先生がおっしゃるように階層間の流動化がこのまま続いていくと捉えています。もちろん、経済成長が落ち着いてく

るなかで、今までは誰でも賃金上昇が見込めましたが、今後どうなっていくのかというところはちよつと気になっていますが、農民工はパワフルな存在だと思いますし、そのパワフルさのなかに可能性のようなものを感じています。例えば、『中国21』Vol・48で、小島麗逸先生と加々美光行先生の対談のなかで、小島先生が興味深い話をされていました。農民工を格差問題として捉えている阿古智子先生の考えを批判されながら、小島先生は、農民工はそんなやわなものじゃないとおっしゃっていました。私自身も、そんなやわでない農民工に惹かれているわけですから、ちよつと嬉しくなったのですが、ただ、やわではないところを明らかにしていくことが今後大事になると感じているところですし、それは、梯子を具体的に明らかにしていくことだと考えています。

金 確かに自由の捉え方は様々です。川村さんは一人っ子政策などで都会の人は縛られていると考えていますね。また、都会は階層が固定化されて、農民工のほ

うが流動的ではありません。彼らのほうがチャンスがあるように見えます。都会の人は出身地に与えられた条件を突破することが難しいです。農村出身者は保障されない分、自分を縛る枠もなく、努力次第でチャンスをつかむこともありえます。今後、社会が一つのシステムに統合された場合、このような流動性が失われるのではないかと懸念されるのですが、そこはいかががでしょうか。

原田 そうですよ。学歴が高ければいい仕事があるとか、そう思いがちですが、農民工の人たちは中卒だろうが小卒だろうが関係なく、上手く生きていきます。それに、金先生が言われる自由の問題は重要です。社会主義国家であるため、自由はないという人もいますが、私は、中国は基本的に自由な国だと思っています。特に、経済面では自由だと捉えています。自由については言いたいことがたくさんあります。もちろん、国家が様々な政策を打ち出し、統制している点はありますが、中国は、いわゆる放任主義的な社会のなかで自由主義的な経済が核に

なっています。そのうえで、この自由主義経済のなかで、人々があまり個人化しなかった歴史があると捉えています。もちろん、人々が団結して利益を守り、権利を主張するというのではなく、地縁・血縁を中心として自衛していく感じですね。

一番悲惨なのは自由主義の下で、人々が孤立していくことです。個人化していくと日本社会のようになってしまおうでしょう。もちろん、社会としては、機会を公平にしなくてはならない面もありますが、それは無理です。機会は不平等で結果も不平等な社会を人間の力で変えることは難しいし無駄な努力だと思えます。こんなことを言えば、勝った者が勝ちということになって、批判されることになるでしょうけどね。ただ、私はそれはそれで良いと思います。努力した者がどんどん先に行つて、豊かになった者が後を引つ張ればいいだけの話です。でも、個別化した社会だと、格差はますます広がります。閉塞感のような空気に包まれます。中国の場合は、地縁・血

縁者の社会的な塊があり、そのなかに優秀な人材がいれば、その人についていくことができるし、学ぶこともできます。農民工というのは、まさに機会が不平等な社会に放り込まれて、そこから這い上がってきています。

逆に、私が懸念しているのは、社会保障など様々な保障を通して人々を個別化させていく歴史があるのではないかと考えています。今、中国の社会において必要だと思われる政策が必ずしも良い結果を生むことはないでしょうし、特に、人間関係を壊すようなものはちよつと考えたほうがいいのではないかと危機感を抱いています。厳先生が言われるように、農民工を放置することは許されないとこの考え方はとても理解できませんし、そもそも農民工という言葉そのものが差別的な言葉です。しかし、日本人から見れば、何か紐帯を持った一団と捉えられます。一つの地縁・血縁だとか、いくつかのグループにまとまっている意味で、農民工をイメージしています。つまり、農村から出てきた一個人ではなく

て、その背後にたくさん人がいるというイメージですね。こうした一団というグループが、良い意味で格差がどんなに広がっていくなかでも、持ちこたえられていると捉えています。私たちが自由主義的な世の中で生きていくなかで、能力のある人間は別に何の問題もないんですよ。それを上手くできない人、障害を持つている人とか、そういう人たちがどのように生きていくべきかと考えたら、グループというかコミュニティとか、そういうなかで捉えていくことが大切ですね。国家の政策でなんとかしなければならぬといっても、実際の政策が具現化されるときに、そうした弱者といわれる人々は商品化されるだけだということを知る必要があるのではないのでしょうか。確かに農民工というのはほとんど死語になっていく話だと思いますが、今振り返ると、新自由主義のこの世の中で生きていく時の、一つの、なるほどこういうふうによれば上手くいくんだというふうな見方もできます。放任されたなかで彼らがどのようにやってきたのかをもう

一回読み解く。中国の人から見ると、それは中国政府の怠慢だということになると思いますが、我々から見ると、このように皆で力を合わせれば面白く生きていくことができるんだというようにも見えるんですね。

敵 今のお話に若干コメントします。西部の農村から沿海部や都市部への出稼ぎ移動は、最初は政府の厳しい規制を受けながら現れた現象でした。どこに働き口があり、給与がいくらかなどの情報も当然ながら政府からの公式発表がありません。そうしたなか、親戚、隣人、同窓などを中心に伝統的な血縁関係、地縁関係に頼って地域間を移動することはむしろ当然の結果です。そして、出稼ぎ先では、医療などの社会保障も不十分なのか、伝統的な関係を生かして助け合いながら暮らしていくこともきわめて合理的です。中国の伝統社会にこのような現象もあるといわれますが、農民工の世界に見られるこうした関係はどちらかといえば、政府の規制や農民差別の制度に由来した部分が大きかっただろうと思います。

す。

また、当然のように、移動や職業選択に対する規制が緩和され、農民への制度的差別がなくなってしまうえば、伝統的な血縁関係も地縁関係もその機能を失うことになりまます。若い世代の出稼ぎ労働者はまさにこのような新しい状況のなかで農村から都市へ移動して普通に働くようになっていきます。このように考えますと、個人的な関係あるいはコネに頼らざるを得ないということは、市民社会の未成熟とも関係しますし、制度や政策から強い影響を受けた結果であり、中国社会固有のものではないといえます。

原田 そこが私も今一番気になっているところです。個人化していく、前近代的な地縁・血縁のようなものから離脱していくということが、ある種、良いのかも知れないことは確かにあります。ただ、それを人間にとっての進歩や発展だと捉えるかどうかは、問題なのかもしれませんね。個人化を含めて。歴史的に見てそれが良かったのかということ突きつけられているのが、今の日本社会だと思

ます。いずれ中国もこの問題を突きつけられることになるのかもしれませんが、別の道も存在していると思います。

金 日本の村落社会では共同体を取り戻すということなどが盛んに言われていますが。

原田 今更そんなことを言っても遅いですよ。それはもう無理なんだから。だったらあるのを壊さないほうがいいんじゃないのという思いが強いですね。

敵 それは価値判断の話になりますが、私が言っているのは実態ですね。一般的に都市化が進むと、血縁関係、地縁関係ではなく、契約関係が重要になっていきますね。

原田 そうそう。新しい契約ですね。

敵 都市に行つて家を借りるのも契約しなければなりません。が、実際、いまは伝統的な血縁関係や地縁関係に頼らずにやれるようになっていきます。

原田 わかります。地縁・血縁に頼らないようになってくる。つまり、誰にも頼れなくなっていく。結局それは財政的な負担が多くなる可能性がある。これは

経済的にみると……。

敵 そうなっていますね。これは好まざる現状かも知れないけれど、中国政府も強権的だといえ、今は国民の支持を気にしていますね。

原田 気にしているからこそ、余計にそこに金を投入するんですかね。

敵 先ほど言ったように、農村部も都市部も医療保険制度や養老保険制度を作っているでしょう。金額は地域によって異なりますが、政府はかなりのお金を出していますね。国民の支持を得ようとしている現れです。

金 労働者を孤立させることによって資本金が利益を得ていますから。

原田 そうなんですけど。私を感じた農民工とは、三〇年経過しても孤立しなかった。格差があっても社会として非常に安定していた。今まで、農民工もいつか爆発するぞ、爆発するぞといわれていたけれど、一回もなかったではないですか。農民工が怒ったというか。敵 豊かになっていくなかでは、怒らない。政府も怒らせないように。

原田 もちろん、私がもし先生の立場だったら、中国政府にもっと何とかしろよというのは痛いほどわかります。

敵 九五年以降、もう二五年経っています。学校教育や社会保障に大きな改善が見られています。それで爆発しなかったとみるべきでしょう。

堀口 敵先生が言われているように、地縁・血縁というのは制度的に整備されていないがために家族とか知り合いを頼らなければいけないということなのですが、制度的には整備されてきていることがあるので、多様化していると思います。日本に来ている研修生（技能実習生）を見てみると、はるかに農民工のほうが、ある工場が嫌だったら、家族を頼ったり知り合いを頼ったり、あるいは人材市場やネットなどを活用して、変わるうと思ったら変わるんですよね。制度的にはともかく……。だから、一つは多様な選択肢があるということと、選べる余地が生まれてきているといったことがあるんだと思います。もう一つは、今後将来的に、農民工という概念自

体がほとんど意味を持たなくなる。そうなれば、中国的な市民社会、あるいは理想的な社会主義国家というものを追求できるのではないか。

最近、欧米や中国国内でも、中国における「市民的公共圏」についての議論が盛んに行われていますが、その多くは政府や共産党に従属的で十分な批判ができていないのではないかと、抑圧的で権威主義的な体制が幅をきかせているのではないかとといったものなんです。それに対して例えば水林彪なんかは、中国的な市民社会はすでに遙か昔からあったのではないかとという主張をしている。つまり、私的な行動、利己心といったものと秩序の問題、いわゆるかつての村松祐次や柏祐賢らの議論と通じる、中国的な「市民社会」のあり方やその問題を解くヒントが隠されているのではないかと注目しています。もう一つは移動の状況です。それが男性が移動するパターンと女性が移動するパターンというのは先行研究でも色々と言われているのですが、特に女性のそれはなかなかよくわからなくて。今

年は十年に一回の人口センサスというところで、実際に行われるかどうか不安なんです。そのあたりが明らかになるのではないかと期待しています。

十年間の変化はとても大きいので、農工の間でどのように女性が動いているのか、彼女たちはどのような職業に、どういう伝手をたどって就いているのかを考察していくことによって、女性の社会や経済に対する役割が見えてくるのではないかと。また今は男女平等社会が求められています。そういった社会の構築に向けて、重要な研究課題にもなっていくのではないかと気がするので、やはり女性をキーワードとして、移動パターンや、その背景にある要因を見ることによって、今後、中国の社会がどのように変化していくのか、ある程度、見越せるのではないかと気がします。

原田 堀口先生が言われるように村松、柏の視点は重要ですね。彼らの視点には、多くのヒントが隠されていると私も思いますし、そのあたりを探求することが、日本人研究者としての使命だと感じ

ています。ただ、ここでこの視点を広げると時間がどれだけあっても足りません。それは、ぜひ次の機会に回すとして、女性の話に戻しますね。農村から都会に出てきた時の女性って、一〇代半ばぐらいでみな若かったですね。あの子たちが結婚のために故郷に戻るのだけけれど、それからまた来ている。女性も流動しているということを痛感しました。要するに、戻ったきりではなく、子どもを産んでまた来るというような。堀口先生は何か推測されるところがあるのではないですか。

堀口 そうですね。先ほどもお話したように、中国女性の労働のあり方や生活のあり方については、意外とよくわかっていないんですね。最近のことは少しずつわかってきましたが、特に社会主義時代のことなどは。それから経済の面では、農民工の女性の労働市場や農村の女性の労働市場がどうなっているのかということもなかなか見えません。最近、馬欣欣先生が都市部における女性労働の本を書いていましたが、あれはたぶん統計

的手法を使っていたと思います。そういう研究が増えてくれば、少しずつ女性労働のことが明らかになってきますが、まだまだ見えない部分が多いと思います。

金 女性労働もそうですが、結婚などに關して、特に都会と農村との間の結婚は戸籍制度の影響をかなり受けていますね。

敵 九八年に戸籍制度に対する微調整があり、それによって変わったと思います。つまり、九八年までの戸籍制度では生まれた子の戸籍は母方の戸籍を受け継がなければなりません。この改革で両親のどちらの戸籍でもいいように変わったんですね。戸籍は結婚相手を選ぶ際の要因ではなくなりました。昔は好きであつても結婚できないケースが多くありました。親からの反対や様々な制度上の制約が理由でした。

金 通常、都会の男性が都会の女性と結婚することが困難であれば、農村の女性を選択することが多いです。しかし、かつては生まれてくる子どもを母親の戸籍に入れるように法律で決まっています。

た。そのため都会の親は息子が農村戸籍の女性と結婚することを嫌がりました。

子どもは農村戸籍になりますから、男性の親が嫌がりました。今は子どもの戸籍をどちらに入れるかを選択できるようになりましてので、都会の男性と農村の女性との結婚が増えるでしょうね。

敵 中国全体では男性が多くて女性が少ない。都市部の男性が同じ都市部の女性と結婚できないときは農村の女性を求めますね。昔は親から反対されてできなかったのですが、九八年以降はその障害がなくなった。天津で観たドラマはまさしく戸籍の話でした。すでに年老いた蘇州の男性が主人公ですが、若い頃に田舎の女性と結婚したことで、後の人生に様々な不幸が起こるのです。

原田 結構多いですよ。昔、そういうドラマを観て、胸が締め付けられました。敵 一〇年ほど前の上海の調査ではそうした要素がなくなっています。たとえ農業戸籍の女性であっても生まれた子どもは旦那さんの戸籍を受け継ぎます。外から来た女性も、一五年以上保険料を納め

ていれば、上海市の保険制度が適用されます。

戸籍の転換と移動については二つの段階で見る必要があります。つまり、農業から非農業への戸籍転換と、農村から都市への戸籍移動という二つの内容があります。戸籍転換という部分は今後なくありませんが、戸籍の移動、例えば、田舎から上海、北京に戸籍を移すことはとても難しい。ある知人の話ですが、日本留学を終えた後に北京に行ったのですが、彼女の持つ安徽省の非農業戸籍を北京に移すことができませんでした。北京の大学に勤める夫との間に子どもが生まれて数年経った後、やっと北京の戸籍が取れました。その許可書はなんと教育部の許可したものです。その大学の許可書に某氏の妻の戸籍転入を認めると書いてありました。一人の戸籍転入に教育部の許可を必要としたのです。

金 おそらく、あれはかなりの特例です。北京の場合、他の地域から来た女性が結婚で戸籍を取得するには、結婚してから一〇年経つことと女性本人が四五歳以上

になること、この両方を満たさなければなりません。

敵 そうです。たぶん特例だと思います。海外留学、大学教授で招聘されたケースに当たりますね。

原田 それは北京と上海ぐらいでしょう。戸籍がなくても働けることは働けるということですよ。

金 でも、車は買えない。

敵 今は家も買えない。しかし、学校教育、特に大学受験の面で北京、上海の戸籍は多くのプレミアムが付いていますね。教育に対する財政投資が多く、名門大学が密集する北京や上海では地元戸籍の子どもが非常に恵まれていると言われます。よく冗談で言われますが、北京大学に受かってても地方の重点大学に受からない北京人も多いのではないかと。だから皆は教育資源の豊富な北京や上海の戸籍を必死に取ろうとしているのです。

原田 そういう名門大学があるようなところとか。

金 大学進学だけではなく、様々な面においてプレミアムが付いていますね。最

最終的に戸籍に基づく差別につながっていません。都市、農村の区別だけではありません。都市だけでも一線から五線までランク付けされ、農村はその下でした。農民工は特殊な存在です。

敵 農民工という言葉はいずれ死語になると思います。今はすでに従来の意味がなくなりつつありますね。

堀口 感情的なものでしょうね。あなたのお母さんは農民工だった、という記憶が残ってる間はなかなか難しいかもしれませんね。

金 都市住民は農村住民に対して根強い差別的な見方を持っています。昔、戸籍間の対立はそれほど深刻ではありませんでしたが、徐々に悪化しました。私は住宅に住んでいましたが、父の同僚の皆さんの過半数は方言を使っていました。少数民族の場合、言葉すらわからないこともあります。あの人は北京の人かどうかという意識は全くありませんでした。しかし今は、住民同士の間の差別が露骨になっています。私の従兄は湖北省出身で、大学を卒業してから北京で就職

して、その後、戸籍を取得しました。最初の頃は何度も警察に呼び止められて、職務質問を受けました。つまり、田舎の人だと思われた瞬間から差別意識が生じ、不審者扱いされるのです。

敵 中国社会、中国人は人権意識が欠けています。今回の新型コロナウィルスの中で皆さんも様々なことを聞いたりしていると思いますが、武漢、湖北の人たちは省外で差別されたりしたし、海外から避難のために帰国した人も差別されていました。国民、市民という感覚がありませんね。中国はその点を克服しない限り市民社会とは呼べないと思います。経済大国になっているというだけでは世界に尊敬されるはずもないでしょう。そのあたりのことは学校教育と関係してきます。義務、権利、自由、平等などについて学校教育の中で徹底しないといけないのではないのでしょうか。

日本でもかつては部落とか様々な差別がありました。今もないとは言えませんが、言葉にはできないし、少なくとも制度的に差別があつてはならないように

なっています。以前の著書で書いたことがあります。世界で三大差別の一つとして戸籍制度が挙げられると思います。アメリカの黒人差別、南アフリカのアパルトヘイトはかつてあつたけれど、今は制度としてはなくなっています。つい最近までの中国の戸籍差別は制度としてあつたのですが、今はなくなりつつあります。差別的制度がなくなった後、今度は意識の変革が必要です。意識を変えるためにはやはり学校教育が重要ですが、今の体制下でそれができるのか、あまり楽観視はしていません。

堀口 今、中国の人も海外に行つて中国ではできないことを体感するので、楽観論で言えば以前と比べると……。

敵 もうひとつわかつたことは、海外にいる中国人と国内の中国人の間に、いわゆる愛国を表す言動に大きな違いがはつきり存在していることです。また、海外留学の経験者であっても、帰国している者と海外に留まっている者の間に政府の様々な政策に対する理解もかなり異なっていました。コロナのことで様々な中国

人の立ち位置の違いが浮き彫りになったのです。

堀口 変わらないのですか。

敵 変わってほしいのですが、なかなか難しいというのが実感です。

まとめ

金 本日は、農民工の過去、現在、未来について、各自のご経験を踏まえて話していただきました。最後になりますか、展望とまとめを話していただけますか。ではせっかくなので聞きたいことがあれば質問も踏まえて、川村さんからまとめてください。

川村 はい。私は農民工を研究するうえで、農民工が流動したことによって果たした役割とは何だったのかについて気になっていきます。また、その時代、時代に農民工は何を見ていたのか。それをどのように研究者が捉えていたのかは気になるところだなと、いつも感じています。このあたりは特に敵先生に伺いたいとこ

ろですが、私自身は、今日先生方のお話を伺って、もう一度その世代、世代で農民工がどう取り上げられていたのかを丁寧に見ていきたいと思いました。

また近年、都市化を抑制する政策から、一定程度の都市化を推し進める政策へと転換しつつあるなかにおいて、従来の研究は都市戸籍を取得できるか、また行政サービスを受けるかどうかといった点に焦点化されています。ですが、私は、農民工たちの約四〇年間にわたる経験とそのなかで培ってきた、居住地の自由な移動や制度の狭間にあることにより獲得されてきた、ある種の社会生活上の自由な立場についても分析していきたいと思っています。そのことを通して、農民工の階層化が進んでいる実態を明らかにして、都市化政策を各階層の農民工がどのように受け止めているのかを、農民工の視点から明らかにしていきたいです。

敵 まず、どのような役割を果たしたのか。経済学的に言うと、農民工は労働力として豊富かつ安価であり、中国の経済

成長、世界の工場を支えたという点では共通認識ができています。ところが、農民工を一つのまとまりとしてではなく、一人ひとりの人間としてどう見るべきか。あるいは、彼らは出稼ぎ先で何をどう見ていたかという視点もありません。

農民工ではないからわかりかねる面もありますが、一つは彼らは我々と全く違う視点で都市や都市の人々を見ているのかもしれない。都市に移動して田舎と全く違う世界を間近で見えるようになった彼らは、日頃不平不満を感じたりするかもしれないが、地元住民との様々な格差にさほど反応していなかったのかもしれない。稼ぐことが目的なのだから金さえ稼げばそれでいいじゃないかと思う者も多いだろうし、現場で3Kの仕事が主にやっているとはいえず、田舎の農作業よりはまだまだではないのかという調査の結果もあります。中国語でいう「比上不足、比下有余」の社会的心理があるからこそ、多くの農民工は都会で何とか暮らしていかけているのだらうと思います。

また、このような社会的心理は別に農民工の世界にだけ存在するのではなく、どの世界にも多かれ少なかれ存在しているといえますね。上には及ばないけれども自分の下に誰かがいっぱいいる、また、昨日に比べて今日は良くなっているということさえあれば、社会的安定はある程度保たれるのです。労働としての役割が果たされた結果、経済は成長し、生活は豊かになっています。田舎の状況に比べて、一〇年前、二〇年前と比べて、そうした満足感が出てくるのでしょうか。「比上不足、比下有餘」という社会的心理が存続し、漸進的ながら、政府は様々な努力を払って農民工も含む国民の社会経済状況を改善している限りにおいて、大きな問題は起こらないでしょう。

金 確かに今、先生がおっしゃられるように経済的な役割もありますし、彼らは中国の中で決して少数派ではありませんから、彼らの社会的なニーズや、先ほどの医療制度とか市民権の問題とか様々な問題への要求をするので、それによって中国社会が徐々に進歩していくというこ

ともあるわけですね。要するに、政治的に経済的に社会的に変化していく一つの原動力になっているところも評価するべきではないかなということがやはりありますね。

堀口 一つの時代の産物ですよ。徹先生も言ったように、東アジアの経済発展、特に中国の経済発展に大きく寄与したということは否定はできないですね。もう一つ、戸籍制度という限られた条件の中で、農家の人々が自分たちが生きていくための戦略として、どこに出稼ぎに行つてどこで稼ぐのかというリスクを一人ひとりが回避して、自分たちの「家」を崩壊させないシステムを、改革開放以降、九〇年代初頭までに築き上げてきたということ、時代として見れば農民工という概念自体が役割を終了した。その次に何が来るのかということは、今後、研究も含めて考えていくべき課題だという気がします。

徹 かつて郷鎮企業という言葉がありました。今は経済史の研究のなかで出てくるようになってきます。私は研究者と

しての最初の一〇年間、郷鎮企業の研究に力を入れていましたが、今はそういう研究は必要ではなくなっています。同じように、農民工の研究もそろそろ必要性がなくなるように感じています。研究の対象が消えてしましますから。また、農民工自体は様々な職業階層、もしくは所得階層から構成された一つの集団です。今後は社会階層の研究、格差研究のなかで農民工を見ていく必要があるかもしれませんが、従来とは全く異なる視点が求められるでしょう。

原田 今日、たくさん話してしまつたので、まとめることは難しいのですが、最後に一言加えるなら、三〇年近く農民工と付き合つてきて、彼らから多くのことを学んでいるにもかかわらず、まだ、それを上手く表現することはできていないことを痛感しました。もちろん、個人的な問題としてですが、皆さんも言われていたとおり、農民工という言葉は死語になりつつありますが、個人的には、もう少し農民工の問題を突き詰めて考えていきたいと思えます。その目的は何かと

聞かれても困りますが、まだ、私たちが
見つけるに至っていない事実というか、
中国社会を知るための手掛かりとなるよ
うな何かが隠されているような気がして
います。

金 農民工は時代の産物であり、長い歴
史のなかでは一瞬にして消える存在かも
しれません。しかし、中国の農民、労働
者に関連する諸問題を考えれば、この課
題は長期的なもので、中国社会の様々な
問題を凝縮した部分です。これまでの研
究を継承しながら、新しい視点から見つ
めなおして、さらに若い研究者に伝えて
いくことが大切ですね。

本日、座談会のためにお集まりいただ
きまして、誠にありがとうございます。

(二〇二〇年三月二三日京都)

